

環境保護親子で考えて

みぬま見聞館 SDGs教室



外来種を捕獲する子どもたち18日、さいたま市見沼区のみぬま見聞館

川の生き物や環境保護に関心を持ってもらおうと、「SDGsお魚教室」が18日、さいたま市見沼区の大宮南部浄化センター・みぬま見聞館で開催された。参加した親子ら14人は生態系について学んだ後、同館に併設された自然庭園で外来種の駆除にも挑戦した。

「埼玉県に住む川の魚は116種類。約7割が残念ながら外来種です」講師を務めたのは、市環境教育ネットワークパートナーの橋本健一さん(54)。

外来種駆除に挑戦

大日本ダイヤコンサルタンツ所属。市内の川や池で調査を続け、イヌタヌキモやムサシノジュズカケハゼといった希少種を発見している。

そんな橋本さんが警鐘を鳴らすのは、増え続ける外来種が存在。もともとは人間が蚊の幼虫退治や釣りなどの目的で持ち込んだものだ。環境省レッドリストで「絶滅危惧ⅠA類」に指定され、県内では絶滅した淡水魚「ゼニタナゴ」は1980年代まで見沼代用水にも生息していたという。

プランクトンやミドリムシなどの小さな生き物は「生態系ピラミッド」を維持する上で重要だが、外来種や水質汚染などによって大きな影響を受けている。橋本さんは油を固め

て燃えるごみとして捨てたり、台所の排水口にゴミ取りネットをつけたりするなど、日々の暮らしの中でできることも紹介した。

その後、見沼地域の昔ながらの雑木林や湿地帯、せせらぎなどを復元した自然庭園へ。歩いて観察した後、ペットボトルを活用した罠を引き上げ、アメリカザリガニやカダヤシなどの外来種を捕獲した。

観察を終えた桜区の小学5年、猪越勇介さん(10)は「コンクリートばかりのまちの中と比べて、すごく涼しかった」と驚いた様子。「生き物は何でも好き。小さなごみをポケットに入れてしまつことがあるので、ごみ箱に捨てるように気を付けたい」と話していた。

(金森有紀)